

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

本編

2016
9

ISSN 1340-8917



農・林・水産業×福祉

本誌は、'宝くじ'の社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



児童養護施設の子ども達との野菜作り

—農業体験を通じ、自然や異世代と交流—

NPO法人あぐりばる代表

● 東海林 幸恵

自然ってなんだろう
空はどうしてこんなに広いのだろう

いろいろな疑問がわきあがるのと同時に、それらは人の思うようにはいかないことも畑や自然の中で教わった様な気がする。だからこそ、それらを大切にしなければいけないのだと何となく感じたのだと思う。田舎から都市部に出てきた私にとって札幌は、自然や異世代との交流をもてる場所が少ないように感じていた。

そういうことから、自分の畑に子どもたちが気軽に遊びに来られるような場所を作りたいと思い始めていた。子どもたちにとって親戚の農家の家に遊びに行く感覚で、田舎の様な所。畑と一緒に過ごす中で感じたり、考えたりするきっかけの場所を作りたいと思った。

◆ ◆ ◆
あぐりばるを設立、
通年型の農業体験をスタート

それらのことが重なり、子どもの農業体験を行うため、2012年4月、NPO法人あぐりばるを設立。

近所の農家さんや町内会、子どもたちにとっておじいちゃんおばあちゃんとなる世代の方々、ボランティアの学生に声をかけ協力をお願いした。そうして養護施設の小学生の子どもたちを畑に招待するようになった。

5月〜10月の間、月1回程度畑に来て、野菜を植えたり草をむしったり成長の様子や季節の変化を体感する。

1シーズンかけて育てたお米、じゃがいも、にんじん、玉ねぎを使いカレーライスを食べるのが



じゃがいも、にんじん、玉ねぎなどを育てているカレーライス畑

◆ ◆ ◆
遊休農地で農業を始めた素人の集まり

農業体験を行う畑のベースとなる農業生産法人ふるさとファームを設立し6年目を迎えた。私は、日々そこで野菜を作っている。

遊休農地を借り、素人が集まり、何もないとこ
ろから右も左もわからず農業を始めた。実際に野

菜を作ってみると、技術もない、勝手もわからない私たちでは販売に適さない規格外野菜も沢山できてしまった。食べられる野菜を捨てるのはもったいない、誰か食べてくれないだろうか。そんな思いから養護施設を紹介していただき、野菜を持つていくようになる。

何度も施設に通う中で、子どもたちから野菜を見たリアクションや言葉をかけてくれるようになり、彼らに広い畑で農業体験をしてもらえたらいいなと思うようになった。

◆ ◆ ◆
畑が田舎の様な場所の1つになれば

私は、田舎育ちで小さいころから自然や生き物に触れてきた方だった。命の大切さや自然の大きさを誰かが言葉で説明してくれたわけではないが、祖父母の家庭菜園を手伝ったり、山の中を散歩したり、空を眺めたり、そういう時間が自分を育ててくれたのではないかと思っている。

命ってなんだろう



田植えの風景



隣の農家さんからの差し入れ



稲刈りの風景

目標である。お米の苗は学生時代の友人にお願いし、余り苗を毎年分けてもらっている。

手で植えるのはもちろんのこと収穫も鎌を使って刈り取り、はさにかけて、天日干しにする。そして昔ながらの脱穀機や唐箕を使って自分たちで精米までを行う。

1日の流れとしては午前中に田植えや草むしり、収穫などの畑仕事を体験し、昼食は畑で採れた野菜を使ってピザを作り、手作りのかまどで焼いて食べ、午後からは蛙を探したり、虫を捕まえたり、思い思いに敷地の中を駆け回る。

おやつには隣の農家さんが差し入れてくれるスイカを食べ、誰が一番種を遠くに飛ばせるかを競う。作ったものを自分たちで食べることで体験し、楽しく遊ぶ部分と仕事としての農業に触れることも心がけている。

◆◆◆ 繰り返す時間の中で感じる 子どもたちの変化

初めは田んぼに裸足で入るのを怖がるが、だん

だんと泥が跳ねることも、しりもちをついて泥だらけになることも楽しそうに笑う。

1年目は飽きたり疲れたりして1列も植えられなかった子たちが、2年目は1列植えられるようになり、3年目は他の子のフォローにまで回るようになる。

毎年毎月、子どもたちの成長をとっても感じる。精米の時には、小さな精米機にお米を入れ徐々に米が白くなつていく様子を子どもたちはとても興味を持ち眺める。中には精米の作業を飽きずにとずっと行う子もいる。「これ好きなの?」と聞くとも真剣に精米機を見ながら「うん」と言う。

◆◆◆ 夜の農業体験

今年の新たな取り組みは、夏に夜の農業体験を行うことだ。夕方から来て草むしりや田んぼの観察を行い、みんなでバーベキューを食べ、暗くなったら畑の小川で蛍を眺めるといふものだ。子ども達にとって夏休みのイベントの一つになれば

と思っている。

本来は泊りがけのアグリワークキャンプを企画していたが、予算の都合上キャンプまでとはいかなかった。基本的に食材費やその他必要なものに關しては自前で調達し、収穫した野菜の一部を販売することで資金の一部としている。

課題としては、もう少し予算を確保しキャンプや子ども用の長靴や軍手などの備品を揃えられたらと思う。

◆◆◆ また前に進もうと思えるような 場所になれば

彼らが社会に出ていったとき、悩んだり立ち止まったりする時があると思う。そんな時に気分転換に立ち寄れ、自然の中で駆けまわり野菜を育てたことを思い出し、また前に進もうと思えるような場所の一つになればと願う。

もしかすると思い出すことなんてないのかもしれないが、それでもここで毎年野菜やお米を育て自然に触れていたことは「生きる」ことの基礎というヒントになるのではないだろうか。

私たちも彼らにはいつも支えてもらっている。新規就農して5年が経つその中には歯がゆさや挫けてしまふようなことが幾度とあった。ここでやめてしまえば彼らを招待できなくなる。それは自分たちが一番したくないことであると。そう思い踏ん張りながら続けてこままで来ることができた。

自分達にできることは限りなく小さい。それでも大切なことだと思うのでこれからも続けていきたいと考えている。益々他の場所でもこういう取り組みが増えたら素敵だなと思う。